

2014年度 礪山 雅 客員教授 音楽学 特別講義

1. 日 時 : 2014年 7月 8日(火) 15時15分～18時00分
2. 場 所 : F号館 215 教室
3. 対象学生【必修】 : 大学 音楽学専攻生 他聴講可 (学内のみ)
4. 講 師 紹 介 : 礪 山 雅

1946年東京に生まれ、長野県松本市で育つ。東京大学文学部および同大学院で、美学藝術学を専攻。1977年から国立音楽大学に勤務し、2012年3月に退職。前日本音楽学会会長。現在、国立音楽大学招聘教授および大阪音楽大学客員教授。日本芸術振興会評議員、サントリー芸術財団理事、日本ワーグナー協会理事、住友生命健康財団理事、いずみホール音楽ディレクターを務めるほか、毎日新聞に音楽批評を執筆。1988年に著作『バッハ／魂のエヴァンゲリスト』（東京書籍、現講談社学術文庫）により第1回辻莊一賞、1994年に著作『マタイ受難曲』により第10回京都音楽賞研究評論部門賞を受賞、2011年には大阪市市民表彰を受ける。著作に『バロック音楽名曲鑑賞事典』（講談社学術文庫）、『バッハ／カンタータの森を歩む』全3巻（東京書籍）、『バロック音楽』（NHKブックス）、『J.S.バッハ』（講談社現代新書）、『救済の音楽』（音楽之友社）、『モーツァルト』（ちくま学芸文庫）など、訳書にザスラウ『モーツァルトのシンフォニー』全2巻（同）、ヴォルフ『バッハ／ロ短調ミサ曲』（春秋社）などがある。

5. 講 義 概 要

モーツァルト流「愛の描き方」

《コジ・ファン・トゥッテ》は、誤解にさらされてきた作品である。この作品の内容に憤慨する人は、ベートーヴェン以来、枚挙にいとまがない。「女はみんなこうしたもの」という訳題を使わず、イタリア語で曲が知られているのも、批判に配慮したものだろう。

だが私は、この作品はモーツァルトの「愛の賛歌」であると思っている。こういうユーモラスな、あるいはシニカルな器の中に真実の愛を盛り込むのが、モーツァルトのモーツァルトらしいところなのだ。そう思えば、これほど演奏しがいのある作品はない。

作品の真価を理解するためには、台本と音楽を、ドラマの進行に即して、丁寧に見てゆく必要がある。鍵を握るのはフィオルディリージで、刻々と変わってゆく彼女の姿に、愛と向き合う女性の真実の姿を見ることができる。

講義では、ドラマの構成、人物の造形、各曲の役割、楽器の使い方、表現のポイントなどから作品を分析し、オペラに対する眼を養う。